



緑園の授業 1～英語スピーチで研修旅行を振り返る

2年次生は12月初旬に沖縄研修旅行に行ってきた。旅行前の様々な授業で沖縄について取り上げて生徒に刺激を与えました。

今回、取り上げる授業は伊藤先生のコミュニケーション英語Ⅱです。伊藤先生は生徒達が楽しんできた旅行について英語でスピーチさせることを計画しました。原稿を作成し暗記をしてみんなの前でスピーチすることをゴールに据えました。

そのスピーチの本番の授業を見学しました。生徒にとって英語で文を書くことは非常にハードルが高く、なかなか文を仕上げる事ができなかったと思います。さらに暗記してスピーチとなると、このゴール設定にどれくらいの生徒が達することができるのか興味がありました。

原稿を読んでいる生徒もいましたが、かなり長い文章を完成させていました。暗記をしてスピーチした生徒も多くいました。

高い目標設定に向かって力を振り絞った様子が伝わってきました。生徒それぞれの到達点は違っていたのですが、今までの英語力を総動員して自分の経験と思いをまとめ述べていたことを感じました。

二人の生徒の英文を掲載します。



My School Trip by Nakamura Madoka

We went to Okinawa from December 1st to 4th. I took flight for the first time.

On the first day, we went to Himeyuri Peace Museum and Gama.

On the second day, we went to "Nuchimasu" and the sea with our host mother. The sea was very beautiful!

I took many pictures. Unfortunately, it was rainy. At night, we made "Sata-andagis." It was delicious.

On the third day, we got up at 5:00 am in the morning. Then, we went to the sea with our host mother again. I played on the beach and in the sea. I was very happy!

On the last day, we went to Kokusai Street. There were lots of shops on the street. I bought "Churadama," a T-shirt, and "Umibudo" for my family. I felt very tired, but Okinawa was very exciting. So I want to go to Okinawa again. Thank you for reading.

緑園の授業 2～「児童文学研究」の授業より

二つ目に紹介するのは、児童文学研究の授業です。英語のスピーチもそうですが、生徒のモチベーションをどう高めるかは先生方が頭を悩ますところです。

児童文学研究では、児童文学の鑑賞、創作を中心に学んでいます。鑑賞はもちろん大事ですが、文章を書く能力を高めることも重要です。

先生はモチベーションを高めるため、公募のエッセイへの応募を生徒に勧めています。全員ではありませんがほとんどの生徒が応募するそうです。5800人の応募者の入賞の9作品中に2年次の根岸佑圭さんの作品が入りました。ある文具・事務機メーカーによる「あなたが今、ホチキスしたいこと」をテーマとしたものです。紹介します。

高校の入学式当日の話だ。以前から体調を崩していた祖父が入院することになり、高校に向かう前に祖父を病院に送ることになっていた。母の運転する車に乗り、初日から遅れることを避けたかった私は、時間にあせり一人イライラしていた。口を閉ざした私に、祖父が声をかけてきた。一つの大きな封筒を渡された。見てごらんと言われ、私はノートを手にとった。「ノートあげる」意地を張っていた私は「うん」としか言えなかった。頭の中では時間のことはばかりを考えていたからだ。

家に帰ってからもう一度ノートをあけると、そこには私が小さい時から高校生になるまでに渡してきた手紙や折り紙が、日付とともにびっしり貼られていた。

ページをめくるたびに涙が溢れてきた。すごく嬉しくて涙が止まらなかった。しばらくすると祖父の状態が悪化し、会話すらできなくなった。お礼が言いたいけど、言葉にすると涙が出てきてしまって話にならない。気持ちを手紙にして渡した。祖父との別れがきた。後から聞いた話だが、祖父はいつも手紙をもらうたびに嬉しそうに部屋にこもって、時間をかけて貼っていたそう。私は何であの時、素直に「ありがとう」が言えなかったのか悔やんだ。あのノートは、世界に一つだけの私の宝物だ。



校長 遠藤 誠